

学位審査報告書

新制
人
104

(ふりがな) 氏名	チン ショウ 陳 捷
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 424 号
学位授与の日付	平成20年5月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
<p>(学位論文題目)</p> <p style="text-align: center; margin-top: 100px;">甲骨文字に見える商代信仰の研究 — 神権、王権と文化の交わり —</p>	
論文調査委員	主査 教授 阿辻 哲次 副査 教授 赤松 紀彦 副査 准教授 道坂 昭廣 副査 准教授 辻 正博

氏名

陳捷

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、甲骨文字の分析を通じて商代の信仰を文化史の中に位置づけ、その特質の究明を目指している。具体的には商王が本来的に保持していた神権と王権が、当時の社会や文化の中でどのように相互に関係をもっていたかというテーマに関して、これまでの研究成果をふまえたうえで、いくつか独自の構想を提出しようとするものである。

本論文全体は大きく2部にわかれ、それぞれの部がさらに章に細分化されている。

第1部では甲骨の意義を、主として王の神権と文化との関係に注目して、商代信仰の具象性と抽象性に留意しつつ総合的に考察する。

商代では最終的な意思決定に関与できる王・卿士・庶人・ト・筮の五者のうち、神意を代表する立場にあるトと筮が、圧倒的な権威を持っていた。そして商代の信仰世界において、このトと筮はいずれも甲骨に深く関わっていた。申請者は第1部第1章で、『尚書』洪範など伝統的な文献によって、商代の意思決定の過程においてトと筮が果たした役割を検討している。続く第2章では、占トが行われる時間や場所、あるいは具体的な方法の面から占トの特徴について考察し、第3章では、これまで伝説として語られてきた商代の筮書である『歸藏』の虚実にスポットをあて、『春秋左氏傳』などの記載と、実際に数字のみを刻んだ甲骨に関する李学勤や饒宗頤ら先学の研究成果に基づき、商代に実際に『歸藏』が実在し、甲骨に見える筮は『歸藏』に基づくことを論じている。第4章では、そのトと筮の関係について、両者の共通点と相違点を列挙して述べ、第5章ではトと筮の源流について、近年の考古学の発掘成果を取り入れながら探求を行っている。

以上の考察に基づき、第1部は亀甲と牛骨が、単に占ト道具としてだけでなく、書写材料としては直接関係しないはずの筮の記録にも用いられたのは、トと筮が商代の信仰をともに支えていたからにはほかならない、と指摘する。亀甲牛骨への加熱によるト兆によって示される占トが、奇数か偶数かの数字で示される筮より重視されていたのは疑いないが、しかし両者は互いに補完しながら併用されていた。商代の信仰には事物をト兆によって捉える具象性と、万物を数理によって捉える抽象性が存在し、その両方が甲骨に明確に示されている。中国文明における具象性と抽象性が、かくも古い時期に甲骨に表現されていることは、哲学史や文化史のうえできわめて注目すべき事実である。

後半の第2部では、商王の予言録として固辞を取りあげ、神権と王権との関係に注目している。すなわち甲骨断代における5期分類法により固辞のありかたの変遷が分析され、商王の権威の変化について詳細な検討が展開されている。

第2部第6章では「固」という漢字について、申請者は豊富な用例を掲げて議論を進めている（「固」は卜兆を視て吉凶を判断する意であり、現行の文字ではその仮借字である「稽」が使われる）。申請者は問題の漢字について100種あまりの字形を列挙し、その整理を通じて中間形態を見出し、歴史的変化を明らかにしている。

第7章では、その「固」からはじまる措辞（固辞）を甲骨学で行われる断代によって時期ごとに分類し、それに分析を加えて、性格と変遷を考察している。初期の第1期（申請者はそれを「全盛期」と呼ぶ）と、商滅亡直前の第5期（「泡沫期」）は、中間にある第2～4期（「沈滞期」）より圧倒的に固辞が多い。すなわち第1期の固辞は詳細かつ具体的で多様性を備えているが、しかし第2期からは固辞そのものが激減し、それとともに簡略化と単純化の傾向が現れる。最後の第5期になって数だけは回復するが、内容には具体性がほとんどなく、単純に形式的なものとなった、と申請者は指摘している。

そして第8章で、申請者は固辞の変遷を商王が保持する権威の変容と結びつけて考察している。本来は司祭長・巫祝長・政治指導者という三つの役割が商王の権力的基盤に存在したが、第7章での分析をうけて、時代が進むにつれて巫祝長としての性格が希薄になったと論じている。

すなわち商王は世俗的な王権を増大させてゆくが、それに反して宗教社会に君臨していた巫祝長としての性格を失い、その面における能力や意識を喪失してゆく。その結果として、商王が独裁的君主の性格を増大させていくプロセスを申請者は解明しているのである。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、現存する最古の漢字である甲骨文字を資料として、当時の王と国家にとって最重要の事業であった占卜の記録である卜辞を分析することで、古代の王が保持していた種々の性格の発展と変遷を究明しようとするものである。

文字が刻まれた占卜の記録の存在が明らかになったのは19世紀末のことであるが、爾来100年あまり経過して、その研究は「甲骨学」という名称で、すでに古代学の一領域として多様な展開を示す学問として成熟した。甲骨を資料として、今では個別の漢字の成り立ちの研究をはじめ、それが使われていた商代の国家や社会、文化などの諸相が詳しくわかるようになってきた。

しかし甲骨を資料として大きな成果をあげてきたのは、主として言語学や政治史、農業史などの分野であって、申請者が取りあげた当時の社会における宗教的状况については、いまだ研究はそれほど進展しておらず、未解明な問題がなお多く残されている。

本論文の第一の成果は、古代文化に関わる領域のうち、まだ明確にされていない事象の解明を目指して実物資料に拠ったことにある。甲骨を初期の著録書に見える著名なものから、ごく近年に出土したものまで渉猟し、これに金文や秦簡資料を加え、幅広く考古学的出土物を活用している。甲骨は1970年代にその集大成として『甲骨文合集』が刊行されてからのちも新しい発見があいつぎ、今日も遺跡から大量に出土しつつある。個別の発掘報告に著録されただけのものまで含めれば、出土甲骨の数量は数十万点に及び、その全体を把握するのはきわめて困難な作業である。しかし申請者はこれまでの著録書と研究書は無論のこと、近年の最新成果までほとんどを渉猟した。申請者はさらにそこに独自の観点を導入して、従来はほとんど問題にされていなかった領域に考察を展開している。具体的には固辞を時期ごとに分析することで、占卜を行ったあとの商王の王権のありかたの変化を論じ、そこに王としての性格の変遷を明らかにした。この申請者の議論は、実物資料の分析と時代背景の分析を遺漏なく行ったものである、と評価できる。

氏名	陳捷
----	----

第二の成果は、20世紀初頭の「疑古派」の議論によって等閑視されるきらいのあった伝統的な古典籍の信憑性について、正面から取り組んだことである。たとえば商代には『歸藏』という占ト書があったという記述は、これまで伝説上のものと認識されてきたが、しかし近年の秦簡の発見によって、その実在の可能性が濃厚になった。申請者はこの事実をふまえて、商代における筮のありかたを追究し、甲骨に散見する筮の記述が、圧倒的多数を占める占トの記録と補完的な位置にあることを明らかにした。申請者によるこの事実の解明は、きわめてオリジナリティに富むものであり、今後の中国古代史研究の一方向を示すものとして高く評価できる。

以上のように、申請者は広く知られた資料である甲骨文字を縦横に駆使しながら、従来はほとんどスポットをあてられてこなかった分野に対して、独自の観点から考察を展開している。本論文は文字記録と占トという行為から、古代の文化と社会の実相を広く総合的に捉えようとしており、古代文字と古代政治に関わる今後の研究に対して重要な分野を開拓している。その成果は文字学・歴史学などの領域にわたる視点を備えたものとしても高く評価できる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年4月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。